

R7講評用紙考察【管楽器の皆さんへ】

【コンクールから冬季演奏会まで】

オーバーブロー(力みすぎによる音の割れや乱れ)を防ぐための**「冷静なコントロール」

大きな音を出そうとして闇雲に息を吹き込むのではなく、「音の質」と「ホールの響き」を客観的に把握しながら演奏すること**を指します。

具体的には、以下の4つのポイントに集約されます。

1. 「楽に響かせるイメージ」を持つ

強奏部(fやTutti)において、フィジカルの力に頼りすぎてサウンドが乱れることが課題として指摘されています。

- 脱力したブレンド音：力んで音を押し出すのではなく、**「楽々響かせるイメージ」**を持つことで、より豊かな響きが得られます。
- 美しい時の音色を維持：「楽に吹いている時」の美しい音色やハーモニーを、強奏時にもそのまま維持する意識が「冷静なコントロール」に繋がります。

2. ホールの響きを上手に使う

自分の楽器の音量だけに集中するのではなく、演奏会場全体の響きと自分の音がどうマッチしているかを判断する冷静さが求められています。

- ホールとのマッチング：強奏部でホールの響きとマッチしなくなってしまう瞬間があるため、常に**「ホールの響きを上手に使う」**意識を持つことが必要です。
- 音量以上の質感を大切に：mf(メゾフォルテ)以上のダイナミクスであっても、単なる音の大きさではなく、**「響き」や「色彩感」**を大切にすることが推奨されています。

3. 息のスピードとコンパクトな発音

音が「開きすぎる」のを防ぐための技術的なコントロールです。

- コンパクトな演奏：ファンファーレなどの強奏時、音が開きすぎないように**「コンパクトに、かつスピードの速い息」**で演奏することが助言されています。
- 音の伸びと広がり：金管楽器においては、音量だけでなく「音の伸び、広がり、重さ、軽さ」などを個別にコントロールすることで、サウンドの色を濁らせずに変化させることができます。

4. 役割の理解とバランスの把握

自分の音を制御することは、アンサンブル全体を冷静に見渡すことでもあります。

- 主旋律を埋もれさせない: Tutti(全奏)で力んでしまうと、聴かせたい主旋律(Theme)が埋もれてしまいます。
- 「引き算」の勇気: 全員でフォルテを奏でる際も、対旋律の音量を落としたり、聴こえてほしいパートを際立たせたりする**「ボリュームコントロール」**こそが、冷静な演奏の証です。

結論として、審査員が求める「冷静なコントロール」とは、**「力み(オーバーブロー)を捨てて、脱力した状態でホールの響きを味方につけ、アンサンブルのバランスを崩さない範囲で最大限の豊かな響きを引き出すこと」**だと言えます。

強奏時(Tuttiやフォルテ)において内声部(および中低音パート)が果たすべき役割

単に音量を出すことではなく、**「サウンドの土台としての支え」と「音楽的な明瞭さの確保」**にあります。

具体的な役割と工夫については、以下の通りです。

1. サウンドを下から支え、主旋律を安定させる

内声部や中低音パートには、アンサンブル全体のサウンドを底上げし、安定させる役割が求められています。

- 積極的な参加: 審査員からは、**「中低音パート、内声、積極的に!!」**というアドバイスが送られており、これらのパートが主体的に音を出すことが、全体の響きを豊かにするために不可欠です。
- 低音部の支え: 特に全奏(Tutti)の場面では、低音部がしっかりと支えを提供することで、サウンド全体のバランスが整います。

2. ハーモニーを整え、サウンドをクリアにする

内声部がハーモニーを適切に構成することで、音楽全体の透明度が高まります。

- ハーモニーの整理: メロディ以外の声部(内声など)のハーモニーを整えることで、サウンドと音楽がクリアに聞こえるようになります。
- ピッチの安定: 強奏時でも内声が正確なピッチで和声を作ることで、主旋律がより引き立ちます。

3. 主旋律を際立たせるための「音量のコントロール」

内声部が対旋律(カウンターメロディー)や伴奏を担う場合、主役を邪魔しないための配慮が必要です。

- 音量の引き算：強奏時であっても、対旋律の音量を適切に落とすことで、主旋律が埋もれずに浮かび上がって聞こえるようになります。
- 役割の理解：各自が「今は自分がサポートの役割である」と理解し、全体のバランスを冷静にコントロールすることが、音楽の流れを良くするために重要です。

4. 音色による質感の提供

音量だけでなく、音の「質」によってアンサンブルを支える役割もあります。

- 多角的な音のコントロール：金管楽器などの内声部は、音量だけでなく**音の「伸び、広がり、重さ、軽さ」**をコントロールすることで、サウンドの色を豊かに変化させることができます。
- 脱力した響き：力んで音を押し出すのではなく、脱力したブレンド音を意識することで、他のパートと調和した美しい強奏が実現します。

これらの役割を内声部が意識的に遂行することで、**「音量は大きいが、うるさくない、主旋律がクリアに響く理想的な強奏」**を作ることが可能になります。

主旋律を際立たせるための「音色の質感」の考え方

単なる音量の増大ではなく、**「音の成分やエネルギーの方向性をコントロールすること」**に集約されます。

審査員のアドバイスから導き出される、具体的な質感のコントロール方法は以下の通りです。

1. 物理的な音の要素を個別に制御する(金管・管楽器全般)

金管楽器などにおいて、ダイナミクス(音量)に頼らずにサウンドの色を変えるための4つの指標が示されています。

- 「伸び」「広がり」「重さ」「軽さ」の使い分け：これらを個別にコントロールすることで、サウンドの色を多彩に変化させることができます。
- 「剛」と「柔」の対比：場面に応じて音の**「剛柔」**を使い分けることで、表現の幅が音量以上に広がります。

2. 息の質とスピードによる輪郭の調整

音がぼやけたり埋もれたりするのを防ぎ、主旋律の質感を際立たせるテクニックです。

- コンパクトで速い息：ファンファーレなどの強奏部では、音が開きすぎないよう、**「コンパクトかつスピードの速い息」**で演奏することで、質感に輝きと直進性が生まれます。
- 息の方向性の意識：音が消える瞬間まで**「息の方向」**を意識し、自分の息を観察し続けることで、フレーズの質感がより明瞭になります。
- 弱奏部でのスピード維持：静かな場面(弱奏部)こそ、音が鳴りきらなくななるよう息のスピードを下げないことが、透明感のある質感を保つ秘訣です。

3. 「脱力」による豊かな響き(ブレンド音)の追求

力みは音を硬くし、他のパートと分離させてしまいます。主旋律を美しく際立たせるには、周囲と調和しつつも豊かな響きを持つ質感が必要です。

- 楽々響かせるイメージ：強奏時ほど力まず、**「楽々響かせるイメージ」**を持つことで、音が割れずに豊かな質感が保たれます。
- 脱力したブレンド音：「力み」を捨てて脱力したブレンド音を目指すことで、サウンドが濁らず、主旋律が自然に浮かび上がります。

4. 楽器の特性を活かした質感の微調整

- 高音域の引き算による質向上：例えばソプラノサックスなどは、あえて音量を少し落とすことで、より良い音色(質感)になり、雰囲気を作りやすくなる場合があります。
- 特殊奏法での音色維持：ペンドやポルタメントを使用する際も、**「音色を崩さない(色合いを濁らせない)」**ように研究することで、独特の質感を表現力に繋げられます。

5. 発音前の準備(打楽器・鍵盤楽器)

- 深いブレスによる同期：鍵盤楽器などは、発音の前に管楽器と同じような**「深いブレス」**をとることで、音の入りが揃うだけでなく、音の質感そのものが管楽器のサウンドと一体化しやすくなります。

これらの「質感」の変化は、各自が**「今は自分が主張する場面か、混ざる場面か、あるいは歌う場面か」**という明確な意思を持つことで、より効果的に音楽の「彩り」として現れるようになります。,